Ｊ 幹事会企画セッション「社会思想史の系譜学（２）：ケンブリッジ学派とはなんであり、どのような影響を私たちに与えたのか」報告書

報告者：竹澤祐丈（京都大学）
討論者：原田哲史（関西学院大学）
司会：後藤浩子（法政大学）

（１）竹澤報告
「ケンブリッジ学派とは誰であり、私たちにいかなる方法論的な影響を与えてきたのか？
―近代イギリスを中心とする社会思想史研究を事例にしながら―」

これまでのケンブリッジ学派（以降、CS と略記）の方法論の導入が日本で遅れた主要因は、社会思想史研究（以降、思想史研究と略記）におけるマルクス主義やウェーバー流の方法論の多大な影響の存在だけでなく、従来の CS の紹介が、論点設定と解釈の特徴に十分に言及しないものであったために、CS の特徴が他の対抗的解釈との対比において具体的に提示されてこなかった点にある。このため既に日本で実践されていた思想史研究の方法論と類似した要素のみが CS の特徴として無自覚に選択され紹介される傾向があった。この反省を踏まえ、報告ではまず CS とは誰を指すのかが明示され、CS が取り組んだ 4 つの大きな論点が、対抗的解釈との違いとともに説明された。

まず、CS とは誰かについては、ジョン・ポーコック、クエンティン・スキナー、ジョン・ダン、そしてホントが挙げられる。彼らの何らかの共通性から学派の特徴を規定することはそれほど簡単ではないが、知的影響についての各人の回想を参照すると、Ｄ・フォーブス、Ｐ・ラズレット、そしてバターフィールドの名が出てくる。ポーコックは、バターフィールドの下で、複数の言語的文脈の併存と誘導を示す歴史叙述のあり方を自覚したのが、ケンブリッジ的研究の始まりだったといっている。ホントは、バターフィールドが提示したプロテスタント中心史観とウィッグ中心史観の両面批判を行うという課題の追求こそが CS の共通項であり、これはポーコックの研究の道筋とフォーブスの道筋に沿って遂行され、自らは後者の道を引き継ぐとしている。したがって、CS はたんに文脈主義という研究手法だけでは特徴づけられない。

また、文脈主義といっても、CS の特徴は、哲学の中に政治思想研究を置いたオックスフォード大学に対して、歴史学の中に政治思想研究を置いた J・シーリー以来のケンブリッジ大学のカリキュラム編成を背景にしている点に留意する必要がある。

CS が取り組んだ 4 つの大きな論点は、第一にギリシアとローマの知的遺産（特に共和主義思想）の継承に関するものである。これは、共和主義思想やルネサンス・ヒューマニズム研究で比較的広く認識されてきた。これについての対抗的解釈としては、共和主義思想が内包する宗教性に着目した J. Scott や C. Davis などのものがある。しかし、共和主義の宗教性

については、日本では着目されてこなかった。

しかし、世俗と宗教の関係に関しては、まさに第二の論点と見なしうるほど、ポーコックには世俗化された宗教性を切り口とした多くの論考が存在する。彼は宗教思想と世俗思想の絡み合いから新しい思想や歴史理解が出現する様相を主題化しているが、これはバターフィールドの問題意識を受け継いだものだ。これに対して、スキナーは、近代を世俗化（脱宗教化）の歴史として描写することにより、この第二の論点でもポーコックと異なっている。

このスキナーの宗教思想への関心の薄さを CS の特徴と見なして、経済学を含むより広範な学問分野からのアプローチを総合して対抗的解釈を示しているのが、D. Winch、J. Buttow、S. Collini などのサセックス学派である。Collini は、一つの学問分野に収まらずに周辺化されているテーマや人物の群小著作の分析を通じて既存の学問分野の屋台骨を揺り動かし、ある解釈枠組みの規律に固執せず、過去の思想的営みに意義を見出すことに拘らない姿勢を提唱することで、CS と自身を線引きしている。

第三の論点は、18 世紀の商業社会の問題（Political Economy の登場の衝撃）に関する論点である。これは CS の題材として広く知られてはいるが、実は CS 内部でかなりの相違がある。まず、スキナーは商業に独自の重要性を見出さず、18 世紀後半の思想的断絶を受け止めてこなかった。これに対して、ポーコックとダン、ホントは、ニュアンスは異なるところがあるものの、商業社会の衝撃を基本的には認識している。

第四の論点は、啓蒙思想の地理的・内容的な多様性に関する論点である。ポーコックが啓蒙思想の多様性に言及する場合、地域的なものだけでなく、宗教思想との関わり方の様相の多様性をも含意しているが、この点はかなり看過されてきた。ポーコックの「保守的な啓蒙」は、日本でも時間差なく受容されたが、これは、J. Israel の「急進的啓蒙思想」への対抗的解釈であった。Israel は脱宗教化、思想的急進性と政治的なそれの同一視、現代社会の価値観の先取という意味での革新性を啓蒙思想の中核と見なし、政治的保守性や宗教性をもつ思想家を対象から除外したのに対し、ポーコックは宗教的思想を含む英国啓蒙思想の固有性を描こうとした。ただ、啓蒙の国別性の強調は J. Robertson によって批判されている。

日本における CS の受容については、水田洋が『富と徳』邦訳あとがきと『思想の国際的転位』（2000）においてポーコックの共和主義解釈とスキナーの方法論の受容のあり方に対する警告を行っていると解釈できるコメントを残している。水田は、狭義の方法論とそれによる成果を切り分けて評価すべきとしたうえで、CS の方法論に新規性は見いだせないと言っている。この理由は、CS の知的傾向が、水田が実践し語ってきた思想史研究の要諦に類似しているからであろう。R. Whatmore は、CS の特徴を、次のようにまとめている。思想の断絶、意図せざる結果、政治的議論が招いた悲劇的な失敗や失われた諸伝統」の強調、群小の人物に着目することで偉大な思想家の注目されてこなかった側面の焦点化、極端な包括性を主張するテクスト解釈への懐疑的な姿勢（*A Companion to Intellectual History*, London, 2015, p. 8）。水田に即して言えば、まずテクストの誤解を含めて思想史であるという姿勢であり、個々の思想の意図せざる結果をより一般的に起こりうる問題として捉え、具

体的には、保守的な思想が持つ革新的効果という逆説に着目した点である。第二には、言葉や概念が異なる文脈に置かれることによって、含意を変容させる点への着目であり、その点で、翻訳を媒介とする思想の受容への鋭敏な注視である。

CS の研究活動の中心には、バターフィールドのウィッグ史観相対化に惹起された上述のような中核的な問いがあるのであり、これに対応する（狭義の）方法論が文脈主義や言説分析であった。しかし、日本においては、そのような問題意識や論点は等閑に付され、狭義の方法論だけが注目された。こう考えると、CS の日本への影響は、喧伝されるよりは小さな影響、あるいは影響はほぼなかったと言うべきではないか。

どのような課題を克服するために（狭義の）方法論が練り上げられてきたのかを意識しないような、いわば論点ぬきの（狭義の）方法の受容、さらには大きな歴史像への向き合い方を踏まえない個別事例の消化は、容易にドグマ化や方法論 methodology 化する危険性を孕む。ケンブリッジの思想史研究者に共通するのは、19 世紀から 20 世紀にかけて支配的だったものの見方や解釈に対する懐疑の精神だったのであり、彼らが共通して持つと想定されるような方法論によってであってはならない、とホントは言う。大きな歴史の見直しのために、狭義の方法論だけでなく、その見直しに関わる論点を複数提起して論争を巻き起こしているのが、CS と呼ばれる研究者の緩やかな集団だと言えるだろう。

イギリス史におけるウィッグ史観の見直しという問題意識から生じた CS だが、そこで析出された論点は、イギリス以外の地域の思想史研究でも共有可能なのか。この点についてのコメントが、ドイツ思想史研究者である原田会員から出された。

（2）原田コメント

竹澤報告で CS の第四の論点として示された啓蒙思想の地理的・内容的な多様性、特にポーコックの「保守的な啓蒙」の観点がドイツ啓蒙期の思想史研究においても適用可能であることが、ユストゥス・メーザーの例を通して示される。カントの世襲制批判に対して、メーザーは、選挙王政の伝統において世襲の主体になってきたのは家族ではなく王室や帝室という制度であると解釈し、それを既存のモデルとして示すことで、カントの世襲制批判を支えた。この保守的な啓蒙の枠組みは、日本においても、メーザーを論じた出口勇蔵や小林昇の視座に当てはまる。ポーコック自身、多様な形態の啓蒙の一つとして、フランス啓蒙の中でもモンテスキュー的な啓蒙を区分している。彼が提供した研究枠組みは、イギリス思想圏外においても啓蒙思想の包括的な理解に役立つと思われる。

（3）討論

質疑応答には 1 時間余りがあてられた。会場からは、CS が行ったのは、思想研究における哲学（理論）と歴史の分離ではなかったのか、という意見、CS の成果をブリテン思想圏外で利用しようとする場合、スキナーやポーコックよりも、第三の論点、18 世紀の商業社会の問題に関するホントの研究が、非常に参考になる、という意見などが出された。

今回のセッションは、「社会思想史の系譜学」と題して、創立以来の本学会の研究の対象と方法を振り返る企画の第二回であり、昨年度のセッションの討論で出された「一学問分野として社会思想史を存立させる方法論は存在するのか」という問いを受けてのものでもあった。「近代社会の把握を巡る大きな歴史の見直し」という CS の問題意識がまずあってこそ、文脈主義や言説分析という方法論が出てきたのだ、という竹澤報告の指摘は、ある決まった方法論を共有しない学際的な学会である本学会に、何が不可欠かを示唆していると思われる。

参加人数 30 名
（文責：後藤浩子）